

2019/12/28(土)

『遺伝学の知識と病いの語り』合評会（於：首都大学東京秋葉原サテライト）

「人びとの経験の構造と実践的課題の歴史に入り込むために

—エスノメソドロジー的（かつ現象学的）態度によって可能になったこと（含追記・後記）

千葉大学大学院人文社会科学研究科博士後期課程 三部（さんべ）光太郎

e-mail: interruptedrests@gmail.com

本報告は、『遺伝学の知識と病いの語り』という書物が、エスノメソドロジー的（かつ現象学的）な研究として遂行されることがどのようなことであり、それによって何が可能になったかを跡づけつつ、最終的に論点を提起することを目的とする。

評者はキャリア形成にかかる相談支援や「ひきこもり」支援における就労支援などを対象にしたエスノメソドロジー研究を進めており、医療社会学も現象学も専門とはしていない。そのため、本報告は、本書をとりわけエスノメソドロジー（以下「EM」と略）的に読んだ場合の、ありうる一つの読み方を提示することになるだろうと思われる。

※なお、本報告は、西阪仰氏と評者との共著によって書かれた書評（事情により以下のサイトより公開

<http://www.augnishizaka.com/index.html>）をもとに、評者の責において内容を敷衍するものである。

1.本書の対象

本書が研究するのは、実践的課題への対処の歴史としての、人々の社会生活における遺伝学的知識の運用である。常染色体優性多発性囊胞腎(ADPKD)という遺伝性の病いに関わる人々を事例とした本書を貫くのは、「遺伝学的知識が誰にとって、どのような意味をもつものなのだろうか」という問いである。一般的に遺伝学的知識は、すべての人にとって遺伝性疾患のリスクを示唆しうるものとして位置づけられる。

→しかし、遺伝学的知識はそのなかに人びとの分類（発症者／血縁者、保因者／当事者／血縁者／家族 etc）を含む。それゆえに、遺伝学的知識が人びとに適用されると、知識を（どの時期に、）どのような仕方で受け取るか、どのような分類が自分に適用されるのかに応じて、人びとは自らの経験や人生全体の意味、社会関係（家族や医師、ひいては製薬会社や行政との関係までをもふくむ）を様々な仕方で更新する。

⇒本書は、遺伝学的知識の適用をあらかじめ（すべての人に適用可能であるという仕方で）普遍的なものとして研究の前提にすることによっては見えづらくなってしまう、遺伝性疾患とともに生きる人びと自身にとっての実践的課題への対処（の歴史）としての、社会における遺伝学的知識の運用を描くもの。

評者が、人びとの「実践的課題」と呼んでいるのは、以下のようなこと

- ・遺伝学的知識にどのように出会うのか
- ・いかにして「同じ病いに関する個別バージョンの経験」が患者会において蓄積されうるのか、他の人の病いの経験を参照することで自分自身の経験の意味を更新することはいかに為されるか、
- ・発症時期や進行速度、病態の予期との関連において自分（と家族）の人生の時間経過をどう編成するのか、
- ・新たな遺伝学的知識や技術がもたらす行為の可能性やメンバーシップをどのように分節化するのか etc

2.本書のアプローチ：EM 的かつ現象学的な記述

評者の見る限り、本書が EM 的（かつ現象学的）に思われるるのは以下の 2 点による。

- 1)人々の経験の構造を、人々にとっての（そのつどの）経験の意味から切り離さずに（現象的）、人びとの実践において公的に理解可能なものとして描き出す（EM 的）こと
- 2)人々の経験（の構造）を、人びとが社会生活において対処してきた実践的課題への対処（の歴史）として捉えるという構え・態度もまた、EM 的であるように思う。

→ そうした EM 的な現象への構えは、事例記述の仕方、章の構成や事例の配列、背景情報の提示といった文体が、人々の実践的課題への対処の歴史に入り込んでいくための「練習課題」（cf.前田 2015, Garfinkel2002, Lynch1993=2012, など）としての性格を備えるように編成されていることにも示されているように思う。

1)について：「語り方」が示すもの

著者たちは、しばしば研究者にとっての課題である、経験（事例）をどのように位置づけるかという問題は、人びとが自らの経験を理解し、経験を語ることにおいて（すでに）実践的に対処している問題でもあるという前提から出発する¹⁾。

⇒ インタビューにおいて語られている内容だけでなく、「語り方」に注目するのは、P1 に上述した「実践的課題」に必然的に含みこまれている、以下のような（より一般的な）課題に対処する仕方が（公的に理解可能に=見て・聞いてわかるように）示されているから。

- ・経験を自らのものとして自己帰属するという課題（他者の経験との対照も含まれる）
 - ・経験を一般性・個別性の重ね合わせのなかで適切に理解し提示するという課題、
→ 「普遍性」もまた、人びとの実践に織り込まれていることが「語り方」に示される
 - ・過去の経験と未来の予期の厚み、自己と他者の可能なメンバーシップを織り込むという課題 etc
- = 「語り方」に、経験の連関（経験のネットワーク）のなかでの、特定の経験の位置づけが示されている（P46 ほか「経験をそれと理解できるようにするための方法」）。

2)について：文体編成の読者に対する練習課題としての性格

共著の書評では字数制限の都合で展開できなかったが、この点が本書の意義に通じる非常に大きな点ではないかと考えている。この性格ゆえに、本書を通読することで遺伝学的知識の「普遍性」（「私たちすべてにとって」かかわりがある、ということ）の意味が更新される。

○序章は、遺伝性の病いや遺伝学の知識を喫緊の課題としては受け止めていない可能性の高い人びと（「私たち（市民）すべて」のうちの多くを占めているかもしれない）にとつての、遺伝学的知識の関わり方のリマインダーにもなっている。

⇒ 1 章～2 章は、実際に日常の人生のなかに遺伝学的知識が自身の選択と関係なく「青天の霹靂」のように入り込んでくることとその帰結（「語りの譲り渡し」）から始まり、患者会における経験の共有・蓄積と個々の経験の理解の更新を経て、「同じ病気を持つ」人び

とのメンバーシップにおける未来への損害に備える志向の醸成、「子どもたちの世代」のための患者会の立ち上げと活動、そのなかでの親-子関係の再編成（未来に「証」を残す）までを辿る。

⇒3章と4章では、2章におけるAさん-Bさんの親子関係の記述が、患者会のなかのユニークなP家族の経験に入り込む導きとなる。P家族の（個別の）方法は、移植のドナーとなる夫／父・Jさんのふるまい（／に対する扱い）に顕著に見て取れる。語り方において、しばしば「普通の」（一般的な）方法—Jさんを慎重な説得と同意のプロセスが必要な「個人」として扱う仕方—と対比が示されることによって、「うちの」方法のユニークさ（固有性）を理解することができる。また、Aさんの「透析まで」という病態の未来の区切りは、「Bと一緒に旅行に行けるように今年の夏休みくらいまでは頑張ろう」という人生の目標と重ね合わせられる。他方でBさんのほうは「臓器移植」という共通性のもとで、テレビのドキュメント番組に映る家族と対照することで過去の「うち」の方法を捉えなおし、未来の経験への関心が生まれる。

⇒5章においては、患者会の活動における成果である制度へのアクセスの基準が、人生段階カテゴリーや合併症状との関連において行為選択肢を分節化するとともに、「患者みんな」のなかで、そのつど「現状では制度にアクセスしえない人びと」を可視化する仕方を描き出す。そうした差異を前提に、公的な制度へのアクセシビリティを求めていく患者会の活動は、普遍的な人権の請求の歴史をリマインドさせることから、「シティズンシップの請求」として表現されるに至る。

↓

◎序章における「私たち（市民）すべてにとって」（という「普遍性」）は、表現形式は同じでも、本書を通じて細部に示された、「そういう立場に立たされた」人びとの経験の固有性を含みこんだ「普遍性」となる。

⇒遺伝性の病いを現状では自身の喫緊の問題として捉えていない人びとへの練習課題として、評者は読んだ。読者に応じて、「側面的普遍」に至る途もまた別様でありうる。このような文体編成によって、患者会の人びとや遺伝性の病いを生きる人びとにとっては、自らの経験の歴史を、経験の細部の多様なあり方を参照しつつ辿り直すリマインダーになるかもしれない。（記述の仕方や事例の配置だけではなく、まえがきP xや終章 pp.192-193にあるように、もちろん個々の事例の細部、経験の詳細が書きしるされていること自体も、この書物を多様な想起と経験の更新の可能性に開くための工夫であるけれども）

☆遺伝学の知識と遺伝性の病いの経験が「誰の」問題なのかということは、遺伝性の病いとともに生きてきた患者やその家族が対処してきた課題である。また「誰の」問題なのかという問いのなかで、「私たちすべてにとって」の意味を更新することは、個々の患者や家族の経験を蓄積しながら、社会的権利の請求をもその活動に含みこんできた、患者会の実践的課題でありつづけてきた。

→その意味で、「私たちすべてにとって」の意味を更新するような仕方でテキストが編成されていることは、著者たちが研究対象である人びとの経験から学んで²⁾課題を受け取り、研究実践上の課題と重なりあうところに、この書物が編まれたことの表れの一つであると言えるだろう。

=研究対象と研究実践が分かちがたく結びつく「ハイブリッド・スタディーズ」³⁾

cf)P183～P184「シティズンシップの請求」事例としてこの患者会の実践を表現することは、それ自体がループ効果の只中の一手でもあること

→社会科学の議論に対して人びとの課題を投げ返そうとする一手でもある。

3.論点の提起：現象としてのインタビューの扱い方について

上記を踏まえたうえで、論点を提起したい。評者がEM的に本書を読んでいて、理解に躊躇るのはおもに4章であった。この点は、もしかすると評者が本書をEM的に読みすぎており、とりわけ3～4章は現象学的なスタイルで書かれていると思われるため、叙述スタイルや記述の目的の違いが反映されているのかもしれないとも思う（また、単に評者が前田先生の文章・文体に馴れ親しんでおり、それに比べて西村先生の文章・文体には慣れていない、ということかもしれない）。そのため、以下の点について、著者（や評者）の先生方はどのようなご見解や印象をお持ちかを伺いたい。

【2019.12.29 追記】

合評会のリプライにおいては、評者の理解する限り、西村氏からは論点1については分析上のイシューであり、論点2の1)については提示されるべき文脈への言及がインタビューという形では残っていなかった（がゆえに分析のなかで然るべき文脈が提示されなかつた）という事情に由来し（つまりその意味ではこれも実際の分析上のイシューであり）、論点2の2)についてはもっぱら表現上の理由で理解の齟齬が生じたことによる、ということが語られた。つまりいずれも、（著者二人の間での）エスノメソドロジー的研究と現象学的研究との間の目的や叙述スタイルの違いに起因するものではないことが語られた。この点については、文献欄のあとに追記した「後記」も参照されたい。

論点1：経験の構造と相互行為形式の関連について

共著の書評において推奨した「インタビューの相互行為的側面」への着目は、「つねに発話を行為連鎖の形で（典型的には「質問・回答」「依頼・受諾」のような行為のペアのように）特定すべき」ということでは決してない。インタビュアーの発話との応接関係に着目することで、経験の構造をよりよく明らかにできるように思える箇所があったということ。

例) 共著の書評で取り上げたP118「区切りをつける時間経験」について

ここでAの「今度は私がどんどん老人になっていくんですね。もう一気に気が抜けたようになくなる、どんどんなっていくんで。」という発話は、「今度は私が」=移植以

前のBさんとの対比で)自らの病状が悪くなっていることの報告になっているよう思う。
→Nが報告の受け止めにおいて「気が抜けた」というAによる表現を繰り返していることは、

- ・報告された経験内容(病態の悪化)の望ましくなさから、悪化の(原因)説明へと受け止めの焦点をずらし(ある種のトラブルの深刻さの軽減=正常化?)、
- ・また、Aの精神状態の変化に関する「気が抜けた」という表現について、内実を語る機会を作っているように見える。

その結果、「気が抜けた」ことの内実の説明として、「気を張って」いた時間の区切り(「移植が無事終わるまで」「主人が仕事にもう一度戻れるまで」)が語られているように見える。
⇒この「気が抜けた」に焦点化したやり取りが、インタビュアーの受け止め方に応じて生じた(いわばAによる変化の報告のなかに副次的に「挿入された」)ものであるという直観は、「でも、センター試験前にパパが…」という、後続する語りが「でも」という表現によって導入されていることによって強化される。

「でも」に続いて語られる事柄は、直前の「もうすごい気を張って、…」という発話とは逆説関係はない、Bさんの移植後の変化の報告であり、これはむしろ、「気が抜けた」とに焦点化したNの受け止めの前になされた、Aさん自身の移植後の変化の報告と対比になりうることのように思われる⁴⁾。これは西阪(2013)が考察している、「でも」によって導入された発話を、「でも」の直前の発話との関連から切り離し(直前の発話を飛び越えて)、それ以前の発話に接続する装置としての「でも」の用法に近い印象を持つ。

⇒そう考えると、確かに結果として実際に「語られた」事柄ではあるものの、「気が抜けた／気を張っていた」とことと関連した時間の区切りはAさんにとって、語り方の構造を見る限り、経験の主題というよりその背景(地平)を成していて、インタビュアーの受け止め方によって(触発されて)主題化されたように見える⁵⁾。

↓

◎あくまで重要なのは、ある事柄が自発的に語られたか、インタビュアーの介入によって引き出されたかということではなく、語られた事柄が人びとの経験のネットワークにおいて占めている位置(を、分析において適切に特定できていること)であると思う。

※対象の人びとにとってそのつど関連性(レリヴァンス)を持つ経験のネットワークや、活動・仕事の体系に、事柄・現象を適切に位置づけて提示するという研究者の課題は、実際に遂行される仕方は多様でも、経験や行為の意味を捉えようとする研究にとって的一般的な課題であり、インタビューという「調査手法」(資料の種類?)を採ることに固有の課題ではない(たとえばEM研究において「相互行為」のビデオデータを使用しようと、フィールドノートを資料にしようと、テキストを資料として使おうと、避けて通れない課題)。

【↑「※」は当日口頭で補足したこと】

⇒ インタビュアーの介入があったという事実を必ずしも否定的に捉える必要はなく、あくまで結果的に（事前に予想不可能な形で）ではあれ、経験の構造を見やすい形で表現するような語りを引き出す場合すらある。

→ 3章では、インタビュアーが一般的な関心から（移植に際しては同意のための相談がなされたという一般的な期待のもとで）同意のための相談や告知について聞くことが、一般的な方法と対照される P家族独自の「うちの」方法についての豊かな分節化に寄与していると思われる。

— ↓ 【2019.12.29 追記】 —

○ 合評会の質疑において、「インタビューにおける語りの構造の研究が、経験の構造のEM研究たることはいかにして可能か？そもそも可能なのか？」（大意）という質問があった。この点について評者の当座の回答を整理すると、以下のようになる。

・一般的には、他人に対して経験を語る仕方に示されている、経験を（その当人の経験として）理解できるための方法は、（それが他人に対しての語りにおいてであれ）語る当人が自身の経験を理解する仕方の、すくなくとも一部を成しているだろう。

→ つまり、「可能なのか？」と問われれば、「可能である」。

（インタビューに答えるという活動も人びとの社会生活・人生の一部である、という点については鶴田・小宮（2007）も参照のこと）

⇒ しかし一般的に可能であるとして、実際に・プラクティカルにどれくらい（他の、たとえばビデオ映像？を使うことなどに比べて）「良い手段」かは、やはり（人びとの）何を分析するかということに依存する（そして「何を分析すべきか」は、人びとにとつて何が実践的課題として重要なのかに依存する）だろうし、基本的には実際の分析結果を待たずには言えないことだろう。

評者には、本書の「経験の理解の（変化の）仕方を分析する」という分析上の課題が、ADPKDとともに生きる人びとにとっての実践的課題（本資料P1）に即していると考えられるがゆえに、インタビューでの経験の語り（方）を分析するという手段は、結果から見ても少なくともそれほど「悪い手段」には見えなかった。

・またインタビューにおける語りの構造の分析が経験の構造の分析になる場合に、何のどのような分析になるかの内実も、当然のことながら対象依存的であるようにも思う。

⇒ 「何の（経験や行為の）どのような分析になるか」は、インタビューにおける説明実践が、対象の側の経験のネットワークや活動・仕事（社会生活）の体系において占めている位置（説明実践も社会生活の一部だとして、どのように組み込まれているのか）にも依存する部分もあるだろう。

— ↑ 【以上、2019.12.29 追記終わり】 —

論点2：語られた内容相互の関連づけについて

4章の記述はまた、語り方に示されている（見てとれる）こと以上に、インタビューで語られた内容からP家族（やAさん個人）にとっての経験の流れを解釈的に再構成しているようにも見える部分がある。

→この点はとりわけ、EM的研究と現象学的研究の叙述スタイルの相違なのかもしれないとも思った（cf.P75注2の「意味のまとまりごとに区切り、テーマを見出し、そのテーマに沿って語り全体の意味を構成した」）。また、家族の経験を理解するにあたって、別々に取られたインタビューの語りの内容や、ひとつのインタビューのなかの離れた時点での語られた内容を重ね合わせて事実関係を整理することは、人びとの語り（や口述の歴史）を扱う研究者にとって重要なタスクであるに違いないとも思う。

⇒他方で、人びとにとっての経験の編成を明らかにするのであれば、インタビューの内容（表現された経験内容）がいかに重ね合わせられているのか（＝「経験をそれと理解できるようにするための方法」）が、として語り方の詳細の特定や、語りの関連付けが人びとの経験における関連付けであることを理解可能にするコンテキストの提示とともに記述されているほうが、（こと評者の「EM脳」的には）より見通しが良いようにも思う。

躊躇した箇所1)

P120で、2013年の個別インタビューから「Bさんは、「すごい気を張って」いた母親であるAさんことを心配していた」と記述されている。

→2015年に語られた「気を張っていた」時期と重ね合わせれば、たしかにそう言えるかもしれない。しかしP120の2013年時点でのBさんの語りからは、Aさんが「すごい気を張っていた」ことへの志向はあまり見られないようと思われる。P118の断片に手掛かりを求めるべば、断片の後ろから3行目、Aさんの「気を張っていた」語りの直後の「な、思いながら、なあ。」というBさんに対する確認が候補になるようかもしれないが、Bさんからの反応は記述されていない。

躊躇した箇所2) ※ここは複雑なので、口頭の報告時は、細部は省略するかもしれない。

P126引用：「（…）それは自身が「気を張って」、「頑張る」期間であり、「一期に気が抜けたように」という変化の手前の期間である。この「移植」という期間が、この語りでは引き延ばされているように読めるが、他方で、自身の健康状態について医師に指摘を受けている語りの間にはさまれた経験であることから、移植から次の段階への移行が、それ自体が起こることをAさんBさんが語った「何もせん」、「ほったらかして」という言葉で押し留められながらも、生じつつあることが見て取れる。」

（※「Aさんの」に引いた横線は本文の誤植）

→以上の引用は、主にpp.122-124のインタビュー断片に依拠した記述である。

2-a) 「気を張って」「頑張る期間」である「移植」という期間が、「自身の健康状態について医師に指摘を受けている語りの間にはさまれた経験である」とはどのようなことか？

評者の推論：「語りの間にはさまれている」というのは、pp.122-124 の語りのなかに「気を張って」「頑張る」期間であることへの志向が示されているということなのだろうか。最も表層的には、謎としての「何か」（最終的に「腎臓」と表現されるとされる）を突き止めるすることに抵抗しているように見える。

→P122「実際に移植前に A さんは、二年間ぐらい、「今はもうそんなんやってる場合違う」と言って、MRI などの時間のかかる検査をしなかった」という記述をコンテクストとして手掛かりにするなら「今はもうそんなんやってる場合違う」という表現は、「気を張っている」期間に対応するという前提があるということなのだろうか。
…そうだとするなら、その前提を「それと理解できる方法」も併せて記述されているとより明瞭であるように思う。つまり、2 年前のインタビューで表明されていた A さんの（そのときの）態度と、2015 年のインタビューで回顧的に語られた「気を張っていた」期間との関連付けがどのような仕方で為されているのかが記述されているとより見通しがよいように思う。

2-b) 最終的に P126 の断片の分析において、腎臓の診療を継続することで達成されたと記述されている「次の段階への移行」（＝「移植後」への移行）が、
「それ自体が起こることを ~~Aさん~~ の B さんが語った「何もせん」、「ほったらかして」という言葉で押し留められながらも、生じつつある」とはどのようなことか？
とりわけ、B さんが語った「何もせん」「ほったらかして」という言葉によって、「移行」が起こることが押し留められる（「それ自体」も気になるけれど）とはどのようなことか？
評者の推論：ひとまず B さんの「語り方」は、いずれも（患っている母が自分の身体を大事にしていないという意味で）非難がましいものに見える。

⇒それゆえ、A さんが非難に応接して「言い訳」などをする余地が生まれ、それによつて A さんの語りの進行が遅滞させられている ということなのかな。だとするなら、このインタビューで語りが遅延されていることが、「移行」経験の遅延と重ね合わせられるなら、それはいかにしてかという問題が生じるようと思われる。

⇒⇒なぜなら、A さんが語り方において表現している「移行」の経験が、B さんがこのインタビューで行っている発話によって（そのとき）遅延されていたとも、にわかには考えにくいからだ。B さんの「何もせん」「ほいたらかして」が A さんが腎臓の受診に抵抗している際に発せられた発話の再演 だとしても、その発話は非難として聞かれ、むしろ「腎臓の受診＝移行の開始」を促すものではないだろうか。

脚注

- 1)このような、あくまで「経験の語り（方）」に忠実であるという方針には、インタビューの「語り」と「経験（語られる事柄）」との関係を、語り・語り方の詳細から離れて一般的に（たとえば質的研究を支える「理論」でもって）規定しようとするならば一とえば、「語り」には（語られる事柄との関係において）真実性があるか、「語り」自体は臨床的効果を持つ経験たりうるか、「語りにもたらされない経験」のほうにこそ意味があるのではないか、といった問い合わせ一般的に問うならば一、人びとがそのつどの語りという実践（的行為）・語り方において示している経験の仕方のほうが見失われてしまいかねない、ということも含意されているだろう（cf.Garfinkel & Sacks 1970など、構築的分析・formal analysisとEMとの対比を参照）。この研究態度についての声明は、「だからEMや現象学は他より望ましい方法（論）だ」ということを帰結するわけではない。むしろ、EMや現象学は、研究方法と研究対象との極めて強い依存関係を前提するがゆえに、そのつどの経験的研究の結果として何が明らかになったかを待たずして意義を述べることには、他の研究スタイル以上に困難が伴うように思われる。
- 2)インタビューの語りは分析対象である以前に、著者たちのフィールドワークにおいて、対象の人びとがどのような実践的課題に直面しているかに習熟していくための「メンバーのチュートリアル」（Lynch2009）としての側面を備えていたはずだ。
- 3)研究者の課題と、研究対象である人びとの課題とが不可分なものになる「ハイブリッド・スタディーズ」として展開してきた「ワークのEM研究」については、タイムリーにも池谷(2019)がGarfinkel(2002、おもに1章)の議論を紹介しつつ論考を展開している。

【以下、2019.12.29に修正を行った】

その論考のなかで池谷が述べているように、マイケル・リンチによる「ポスト分析的EM」における「認識トピックの再-特定化」（Lynch1993=2012）の推奨は、後期ガーフィンケルが提唱した意味でのハイブリッド・スタディーズとは異なる方向性である。このときにEM研究が帯びるハイブリッド性をめぐって考えることができるかもしれないのは、リンチが後期ガーフィンケルの方針を逸脱してもなお、あえて「認識トピック」の探求を推奨したことの言説実践上の意味である（cf.石井2019）。脚注1で述べたように、EM研究は何が結果として明らかになったかを離れて研究の（一般的な）意義を述べることは非常に難しい。またリンチは、ワークのEMのプログラムに忠実に固有妥当性を追求してハイブリッド性が強まるほど（＝研究方法と研究対象とが分かちがたくなればなるほど）、多様な実践のなかにEM研究は分散し、場合によっては「EM研究」の名のもとに多様な研究を語ることが困難になる（Lynch1999=2000:14-17ほか）という、EM研究の本質的な逆説性を指摘していた。そのような事情のもとで、それでもなお「EM研究」の名のもとに包括される（包括されてきた）研究（群）が、一般的に思想（史）上の有意義性を持つとしたらどのような探求の行き方がありうるか、ということを示す言説実践が「ポスト分析的EM」における「認識トピック」の探求という提言であるとも考えられる。

- 4)なお、Aさんの移植後の状態と対比されていると思われるBさんの移植後の変化について、P119後ろから6行目に「他方でBさんの移植後の状態は、「でも」を挟んで、「だんだん」という変化として語られた」とあるが、「だんだん」という表現は、トランスクリプトのなかに見当たらない（評者が読んでいるのは初版の1刷です）。
- 5)経験において時間性は不可欠な契機でありつつもっぱら非主題的であることから、語りから時間経験を掘り出す作業には、往々にして変化についての比喩的表現（「気が抜けた」）や「流れ方」を表す擬態語（「どんどん」）などの解釈が要請されることがあるという事情がありそうに思う。その意味では、この事例に限らず、表現を解釈する作業が、書き起こしたインタビューを分析する以前にインタビューをしている中で

も行われる（インタビューのなかで特徴的な表現について語りを展開させる機会を作ったり、表現について質問をするといった）ことも、たびたびありそうに思う（という感想）。

文献

- Garfinkel, H. (2002). *Ethnomethodology's program: Working out Durkheim's aphorism*. Rowman & Littlefield Publishers.
- Garfinkel, H., & Sacks, H. (1970). "On formal structures of practical actions".
in *Theoretical sociology*, 338-386.
- 池谷のぞみ.(2019).「社会課題とエスノメソドロジー研究との関わり：救急医療におけるワークの研究を中心」.年報社会学論集, (32), 12-22.
- 石井幸夫.(2019).「エスノメソドロジーの言説性について：<プロトエスノメソドロジーvs.ポスト分析的エスノメソドロジー>と,共通理解をめぐるガーフィンケルの三つのテクスト」.
ソシオロジスト：武蔵社会学論集, 21(1), 39-76.
- Lynch, M.(1993). *Scientific practice and ordinary action: Ethnomethodology and social studies of science*. Cambridge University Press.
(= 2012.『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』 水川喜文・中村和生〔監訳〕 効草書房.)
- .(1999). "Silence in context: Ethnomethodology and social theory." *Human Studies*, 22(2-4), 211-233.
(=2000.「コンテクストのなかの沈黙—エスノメソドロジーと社会理論」石井幸夫訳,文化と社会(2),6-36.)
- . 2009. "Working out what Garfinkel could possibly be doing with "Durkheim's aphorism" ".
in *Sociological Objects: Reconfigurations of Social Theory*, 101-18.
- 前田泰樹.(2015).「「社会学的記述」再考」.一橋社会科学, 7(別冊), 39-60.
- 西阪仰. (2013).「飛び越えの技法—「でも」とともに導入される共感的反応」西阪仰・早野薫・須永将史・黒嶋智美・岩田夏穂.『共感の技法—福島県における足湯ボランティアの会話分析』効草書房,pp.113-126
- 西阪仰・三部光太郎.(2019web公開).「書評『遺伝学の知識と病いの語り』」
<http://www.augnishiizaka.com/index.html> より閲覧可能 (2019.12.20 確認)
- 鶴田幸恵・小宮友根. (2007). 人びとの人生を記述する. ソシオロジ, 52(1), 21-36.
- 山田富秋.(2019).「書評：『遺伝学の知識と病いの語り』」保健医療社会学論集,(30)1,85-86.

後記（2019.12.29 付）

後記に変えて、評者が本報告を行った理由と、本報告の精神について述べておきたい。

評者は、本書を何度も通読するなかで、人びとが「医学的（科学的）」知識を用いて自らの社会生活を組織する方法を、積年のフィールドワークをもとに解明した挑戦的な研究として、この書物が EM 研究の目録にも加えられ、広く日本のエスノメソドロジー・会話分析 (EMCA) の研究者にも読まれるべきだと考えた。理由は報告のなかで示したとおりである。しかし評者の期待に反して、（社交性にとぼしい評者の耳には） EMCA 研究者からの反応はあまり聞こえてはこなかった。評者が海老田氏ならびに河村裕樹氏からの依頼を受諾し、西阪氏との共著の書評を展開する形で、本書について（かなり強調した仕方で） EM 的な研究としての読解を提示した根本の動機は、本書が EMCA の研究者たちにも（もっと）広く読まれ、議論されるきっかけを作りたいということだった。その初発の動機に加え、評者が

現象学的研究を専門としていないこと、登壇に際し「EMCA の観点から」というお題をいただいたこと（この点に関しては上記の動機からしてもありがたい限りであった）、実際のところ著者たちがどのくらい（EM 的であることと、現象学的であることとの）研究方法上の差異を捉えているかはわからないこと、などなどの理由から、「EM 的研究として読んだ」時に感じた疑問について、西村氏に答えていただくという形で論点を提示することとなつた。ここまでが、「EM 的研究として読むこと」に徹した（徹さざるを得なかつた）ことに対する理由（弁解）である。

しかし、EM 的研究と現象学的研究との間の差異かもしれない点について問うた目的は、何が・どこが・どう EM 的／現象学的であるのか、という両者の差異を強調することにはなかった。なぜならば、前田氏と西村氏が本書で実質的にし（ようとし）ていることはかなりの部分で重なり合っているように思われ、それゆえに「方法」の差異はテキスト実践上において、基本的には問題になつてないようと思われたからだ。このことは、あくまで評者の推測では、本書の「経験の固有性を理解する」という課題を遂行するにあたっては、EM 的研究が（現象学的研究に比したときに）力点を置いていると一般的には理解されている「経験（や行為）をそれと理解できるようにするための方法」の分析（=語り方の詳細の特定、適切なコンテクスト・背景情報の提示）と、現象学的研究が（EM 的研究に比したときに）力点を置いていると（評者に）理解されている、経験内容の構成についての分析とが、基本的にセットで提示されなければならないという事情によるのだと思う。つまり、「経験の固有性を理解する」という課題の前では、両者が実際に分析において提示しなければならないことが、おのずとかなりの程度、重なりあうことになるのだと思う。報告時に口頭でも述べたように、本書評では、評者は EM とはそもそも何であり現象学とはそもそも何であるのか、それゆえに何が通底していて何が通約不可能なのか、という水準で語ることを徹底して避けてきた。それは、両者を無理にポリシーによって境界づけることよつて、このエスノメソドロジー的かつ現象学的な研究実践がどのように成し遂げられ、それによって何が達成されているのかが見えづらくなることを避けるための語り方であった。評者は論点の提起を、（そうは見えなかつたかもしれないが）「同じ目的に向かって、実質的にしていることが相當に重なり合っているのであれば、このような記述・分析もあってよいはずでは？」という精神のもとで行った。理解の候補を提示することで、EM 的であることと現象学的であることとの境界づけについては、境界づけそのものの必要性も含めて著者たちの側からの見解を提示してもらおうと試みたのであった。

果たして著者たちからは、本書においては、背景を成す（明示的には語られていない）方針や細部の表現系における差異はあれど、実質的に行った（行おうとしていた）ことにおいて基本的に「方法」上の差はないという応答がなされた（と評者は理解している）。そのことは、本書について「何が・どこが・どう EM 的で、何が・どこが・どう現象学的であるのか？」と問う実質的な意味が乏しいということを示しているのだと、評者は受け止めている。

とはいっても、以上はあくまで評者の認識であり、実践としてのテキストに対する反応は読み方によっては別様でもありうるかもしれない。本報告の本体は単に「テキストに書いてあること」を展開しただけの部分も多く、おそらく誰よりもこの書評を通じて学ぶことが多かったのは評者自身である。人びとの経験や行為の意味を理解するという課題に取り組む者として、貴重な機会をいただいたことに心より感謝したい。